鹿子木敏範先生を悼む

日本医史学会会員　岡村良一

本会名誉会員・熊本大学名誉教授・熊本日独協会名誉会長　鹿子木敏範先生は、昨平成十四年十一月一八日にお亡くなりになった。享年八十一歳であった。

先生のご専門は精神医学であるが、医史学、特に日本とドイツ医学の交流に関する多くの業績がある。その大部分は、著作集『落葉集』として刊行されている。本学会会員であるヴォルフガング・ミヒェル氏は、この著作集について、日本医史学雑誌第四十七巻第四号の中で「日本医史学会名誉会員である鹿子木氏をより深く知る上で必読の書であるばかりか、参考資料としても非常に有用な情報に富んでいる。ぜひ本棚におきたい一冊である。」と紹介されている。

日独両国古典を読みこなす才能をお持ちであった先生は、ドイツ史料探索の旅行で、貴重な多くの史料を新たに見いだし、日独の医史学会に貢献された。特に、シーボルトの日記、コッホ夫妻の和服姿の写真を発見し、公表されたことは特筆すべきであろう。

熊本における医学教育の変遷についても、著作集の中に詳細に述べられている。それだけでなく収集された貴重な史料を長く後世に遺すため、熊本大学医学部構内に肥後医育記念館を建設する

ために尽力された。

平成元年、第九十回日本医史学会を熊本において主催されるとともに、自ら「肥後の医学史」という特別講演の演者をつとめられた。

専門の精神医学においては、クルト・シュナイダーの『臨床精神病理学』をはじめ、五冊の翻訳がある。これらの訳書は、今日も多くの精神科医に読み継がれている。現在、精神医学領域で使われている精神医学専門用語の中には、先生が考案されたものもあるという。文学にも精通されていた先生は、夏目漱石の性格を精神医学的に研究されていたが、昭和四十年には同好の士とともに、日本病跡学会の設立に参画され、以来同学会の理事を務めてこられた。また、司法精神医学の領域でもご活躍になり、昭和五十七年には司法精神医学雑誌を創刊されている。

先生のドイツ語は「大学でドイツ文学を学ばれたあと、熊本医科大学に入学されたのでは」と噂が出たほど堪能であられた。その語学力と日独医学交流に関するご研究で得られた多くのドイツの学者との交流から、乞われて昭和六十二年六月から、熊本日独協会第五代会長に就任された。その間、熊本日独協会を日本で最も活発な協会の一つと称されるまでに導かれた。平成四年には多くのドイツ人学者を招いて、その創立三十周年記念事業を主催された。その後、名誉会長の席に退かれていたが、その創立四十周年記念祝典が終わるのを見届けたかのように、その二日後にご逝去になったのである。

先生の業績に対し、昭和六十二年五月にドイツ連邦共和国大統領から、ドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章が、また、平成八年十一月には我が国の総理大臣から、勲三等旭日中綬章が授与されている。

優れた多くの業績をお持ちにもかかわらず、先生の口から、ご自分の業績についてお聞きしたことは、ただの一度もなかった。先生はまさに「能ある鷹は爪を隠す」の諺そのものの生き方を示して下さっていた。教え子達への教育には、それぞれの個性を尊重し、少しの押しつけもなく、慈父のように見守っていて下さった。葬儀に際し、教え子の一人は

弔辞の中で「私にとって親兄弟の死にまさるとも劣らない寂しさ悲しさです。先生なくして今の私はありませんでした。有り難うございました。」と述べ、「弟子　原田正純」と結ばれた。この「弟子」という言葉は参列者の胸に響いた。先生が教え子達にいかに接し、いかに指導してこられたかが、この一言に集約されていると感じとられた。

今、先生は熊本市の北二十数キロにある菊池市にお眠りになっている。